

第3種動物園認可

29.9.2

熊 本 県

荒瀬ダム撤去に着手

国内初 6年かけ自然の状態へ

熊本県は1日、球磨川の老朽化した県営荒瀬ダム（八代市）の撤去事に着手した。ダムを完全に壊し自然の状態に戻すのは国内で初の試み。戦後整備された多くのインフラ施設が耐用年数に近づく中、国の資金を活用した撤去の事例として全国モデルになりそうだ。ダムの撤去で地元では清流の回復が期待されている。

工事期間は2017年度までの6年間。本年度は八つある水門のうち一つを取り外し、ダムの水を少しずつ流すための設備を設ける。撤去の経費は、護岸補強や

周辺の道路のかさ上げ費用なども含め88億円。当初の県の見積もりでは30億円の資金が不足していたが、工費圧縮などの努力を重ねた上、使い道の自由度が高い国の地域自主

戦略交付金など19億円を活用することで着手にこぎつけた。

この日は午前8時ごろ、堤体の上を通る管理橋に作業員が一般の立ち入りを禁じる柵や看板を設置した。撤去を待ち望んでいた地元住民ら10人ほどが集まり、作業を見守りながら万歳を唱えた。ダムから約1キロ上流に住む



熊本県八代市の県営荒瀬ダム＝2011年12月

元村順真さん(75)は酒を欄干にかけ深々と一礼。「発電で戦後の産業基盤を支えてきた一面もあり、ご苦労さまという気持ち。無事に工事が終わり、豊かな川に戻ってほしい」と感慨深そうに話した。荒瀬ダムは熊本県が1955年に球磨川に建設した発電専用ダム。潮谷義孝前知事が02年、老朽化や川の水質悪化などを理由に撤去を決めたが、08年、費用の確保が難しいとして薄島郁夫知事が存続を表明。しかし環境改善を求める漁協や流域住民らの強い反対を受け、10年に再び撤去に方針転換した。